

いのしがた ど せい ひん と こしな い いせき しゅつど
猪形土製品 十腰内2遺跡出土 1点

国指定重要文化財（平成23年6月27日指定）

全長18cm 高さ9.7cm 厚さ4.8cm

ほんどせいひん しょうわ ねん ひろさきしと
 本土製品は、昭和35年(1960)に弘前市十
 こしな いせき と うじ さるざいせき こしょう きゅう
 腰内(2)遺跡(当時は猿沢遺跡と呼称。旧カメコ
 やま しん やま くぶん しん
 山と新カメコ山に区分され、そのうちの新カメ
 やま さ いせきばんこう はくつちようさ
 コ山を指す。遺跡番号：202011)の発掘調査で
 だい 5 トレンチC区の表土下約50cmの深さ(第Ⅱ
 そう こっかつしよくど そう しゅつど
 層a 黒褐色土層)から出土したものです。

この発掘調査は、食糧増産を目的とした
 こくえい いわきさんろく かいほつ と もな まいぞうぶんかざい
 国営による岩木山麓の開発に伴う埋蔵文化財
 きんきゅうちようさ いっかん おこな せいじようだいがく
 緊急調査の一環で行われたもので、成城大学
 いまいふ じ おし いそぎまさひこし たんと
 の今井富士雄氏や磯崎正彦氏らが担当しました。
 ちょうさ けつか じょうもんじだいこうき たてあなじゅうきよあ
 調査の結果、縄文時代後期の竪穴住居跡や
 はいせきいこう きたとうほく じょうもんじだいこうき ひょうしき
 配石遺構のほか、北東北の縄文時代後期の標式
 と なった土器、石器や土製品などが出土しました。

この土製品のなかで特に注目されたものが、
 いのしがたせいひん
 この猪形土製品です。

その特徴は、両目がはっきりして、両耳が左
 ゆう は だ たてがみ さかだ えもの
 右に張り出し、鬣は逆立ち、あたかも獲物に
 なら 睨みをきかせるような表情で、脚先は蹄を表
 した切れ込みがあり、尻には肛門を表現した穴
 いのしし すがたかたち しゃじつてき ぞうけい
 もあり、猪の姿形を写実的に造形していま
 ます。また、文様は胴部に沈線による幾何学文が

えが ないぶ うじょうじょうもん じゅうてん
 描かれ、その内部には羽状縄文が充填されて
 います。

おも じょうもんじだいこうき ばんき ほっかいどう かんとう
 主に縄文時代後期から晩期に北海道から関東
 ちほう しゅつど いのしがたせいひん なか おお
 地方で出土する猪形土製品の中にあつて、大
 がた いのしし すがた ぐしやうてき ひょうげん ゆうひん
 型で、かつ猪の姿を具象的に表現した優品で、
 びじゅつてき きちよう じょうもんじだい せいしん
 美術的にも貴重です。また、縄文時代の精神
 ぶんか いっぴん しめ どせいひん ひるい
 文化の一端をよく示す土製品として比類のない
 しりょう がくじゅつてき か ち きわ たか ひょうか
 資料であり、学術的価値が極めて高いと評価
 されています。

さて、縄文人は何のためにこの猪を作った
 のでしょうか。定かではありませんが、狩猟の
 さい ぎしき つか かんが
 際の儀式に使われたと考えられています。

へいせい ねん だいえいほくぶつかん
 平成21年(2009)にイギリスの大英博物館で
 てんじ どう ねん じゅうようぶんかざい してい あいしょう
 展示、同23年には重要文化財に指定され、愛称
 めいめい へいせい ねん
 を「いのっち」と命名されました。平成24年には
 せつこうめん れつか み ぶんかちよう ほじょ
 接合面に劣化が見られることから文化庁の補助
 じぎょう しゅうり おこな ほっけんとうじ げっせんぶぶん
 事業で修理が行われ、発見当時から欠損部分
 みぎみみ ふくげん とも かいたいご さいせつごう
 である右耳を復元すると共に、解体後に再接合を
 けんとう ひだりうしろあし ないけい へいせい ねん
 検討したところ、左後足が内傾することが判明
 か の う かぎ と う じ すがた ふくげん
 して、可能な限り当時の姿に復元されています。
 げんざい じょうせつてん み
 現在は、常設展で見ることができます。

(成田 正彦)



左上：修理前 左中：解体状況 左下：復元途中 右：修理後